飛鳥藤原第８４次（万葉ミュージアム）調査
現地説明会資料

奈良国立文化財研究所

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1997年4月27日

飛鳥寺と飛鳥池工房　ー周辺の調査からー

飛鳥寺は、６世紀の終わりにつくられた日本で最初の本格的な伽藍をもつ寺院です。７世紀には多くの寺院がつくられましたが、飛鳥寺はそのなかでも重要な寺のひとつとして扱われてきました。８世紀に都が平城京に遷ったときに、寺も平城京に移されて元興寺となったものの、この地の飛鳥寺も存続します。しかし、その後は徐々に衰退して、多く建物は土のなかに埋もれて、その上は水田や集落となっていました。

1956年に始まった発掘調査で、飛鳥寺の中心伽藍のようすがわかりました。中心伽藍の形式は、中門・回廊で囲まれたなかに、塔を囲んで３つの金堂が並ぶ形式で、日本では他に例がありません。中門の南に南門、回廊の西に西門がありました。飛鳥寺の寺域は、この南門と西門につながる塀で囲まれている範囲です。1982年の調査では、寺域の東北のコーナーが確認され、寺域の規模がほぼわかりました。中心伽藍は寺域の西南隅に位置し、それ以外の部分には、僧房などの寺のいろいろな施設がありました。それらのひとつとして、1992年に今回の発掘区の北側の調査で発見された礎石建物があります。

飛鳥寺の東南には飛鳥池という溜池がありました。古代には、ここは谷でしたが、ある時期に堤が築かれて池になりました。1991年に、飛鳥池の池底から、７世紀中期から８世紀にかけての、工房（飛鳥池工房）跡が発見されました。７世紀の終わりから８世紀にかけてが工房の最盛期でした。ガラスや金属の製品、それをつくるときの工具、その時に出る灰や金属のカスが大量に発見されました。この谷に、かなり高度な生産施設があったことがわかっています。

したがって、今回の調査の主な目的は、飛鳥寺東南隅と、飛鳥池工房北方のようすを解明することです。

現在の調査状況

発掘区の西にある丘陵は、東と北に向かって急激に落ち込んでいます。昔の人たちは、この谷を埋め立てながら、その上に建物や塀や井戸をつくりました。この埋め立ては、何回もおこなわれ、谷にはいろいろな時期の土が積まれています。今、見えている土は、藤原宮の時期に埋められた土で、見えている建物や溝や塀は、藤原宮もしくはそれ以後の時期つくられたものです。今見えている土を掘り下げれば、さらに古い時期の遺構がありますが、それは今後の調査であきらかにする予定です。

調査の成果

東西道路

発掘区の北辺には東西にのびる道路があります。この道路は、丘陵の北端をかすめるようにつくられており、道路の方向は、飛鳥寺の寺域の南や東の塀の方向とは異なっています。道路面には砂利を敷いており、部分的に砂利敷が残っています。この砂利敷の北側には、瓦敷やきれいに並んだ石列があり、道路は何度かつくり替えられたようです。

道路の南には溝があります。溝の幅は２m前後、深さ６０㎝で、部分的に石を積んで護岸としています。石は石敷井戸の北方の南壁だけにしか残っていないので、石敷井戸の正面だけに積んだのかもしれません。

では、この道はどこに繋がるのでしょうか。1992年に飛鳥寺南方遺跡で、丘陵の西側に沿う南北方向の道路が見つかっています。この道路は藤原宮期につくられた

もので、道路面は砂利敷、その西にある溝は石組で、今回発見した道路とよく似ています。また、明日香村教育委員会が現在発掘中の調査区でも、同じような溝が見つかっています。これらの道路と今回発見した東西道路が繋がっていたとすると、丘陵の西裾に沿い、丘陵の北端で東へ迂回する道路があったことになります。

飛鳥寺の寺域の範囲

現在の調査段階では、寺域の東南隅を区切る塀は見つかりませんでした。おそらく、東西道路に沿って、道路の北側に塀があり、寺域の東南隅は道路によって斜めに切られていたようです。東西道路に沿って瓦が多く出土しているので、瓦を用いた塀があったと思われます。

東西道路の南側

東西溝の南に沿って掘立柱の塀があります。また、石敷井戸から東西溝へ抜ける排水溝を地中に埋めていますから、この上にも塀があったと可能性があります。すると、東西道路の南側も、塀で囲まれた施設があったと考えられます。この施設の南を閉じる塀がみつかっていないこと、発掘区の南辺では、炭化物や鋳造に使用した炉、羽口（炉の火元に空気を送るパイプの口の部分）、鉱滓（金属精錬の時に出るカス）が出土していることから、道路の南側は飛鳥池工房と一連の施設と考えられます。おそらく、谷を閉じるようなかたちで塀がつくられて、谷の奥に作業場があったのでしょう。

この一画では、北端の東西道路にちかいところに、石敷井戸や建物が並んでいます。井戸のすぐ東にある建物が、今回みつかった建物のなかで、いちばん大きなものです。その南には、あまり建物はありませんが、南辺部分では小規模な建物や井戸があります。

石敷井戸とその東の建物

石敷井戸は、地面を東西６ｍ・南北８．５ｍにわたって、深さ約60～80㎝ほど地面を掘り下げ、周囲は石積みの壁としています。南北には、下へ降りるための階段があります。内部を、平坦にして、南寄りの中央に井戸本体を掘り、その周囲に石を敷いて舗装しています。平坦面の周囲と、井戸本体から北へ抜ける排水溝をつくり、石組暗渠で東西溝へ排水します。石組暗渠は、排水用トンネルで、石や瓦を使って内部を空洞にしています。

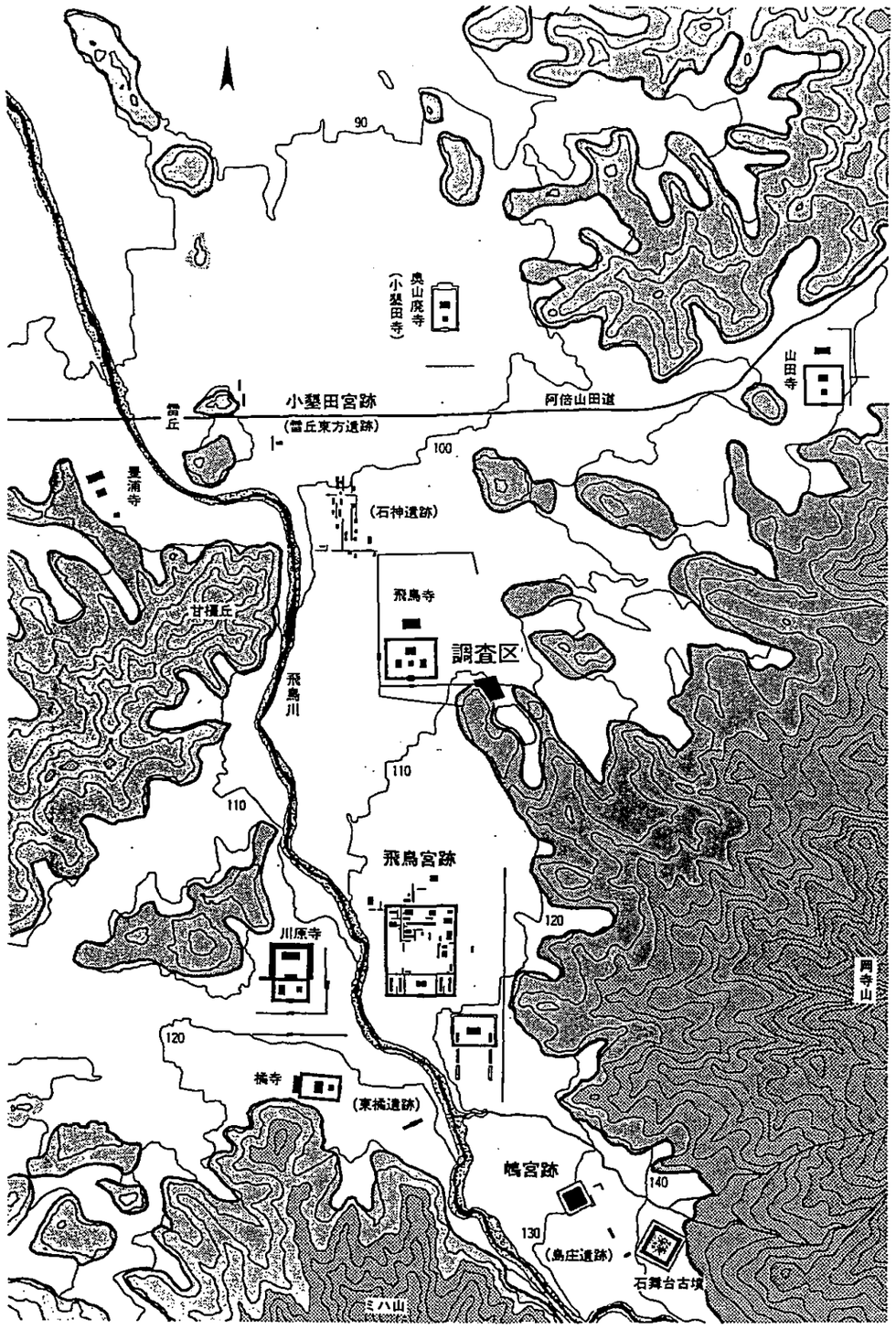
７・８世紀の井戸は数多く発見されていますが、今回発見した井戸のように、井戸周囲の地面を一段低くして、石を敷いて、排水施設まで備えた井戸は少ない。板蓋宮伝承地の井戸、石神遺跡の井戸、平城宮内裏の井戸など、かぎられた場所でしかみつかっていません。当時の格の高い井戸の形式だったと思われます。

このような立派な井戸がここにあることから、この井戸の東にある建物群は、飛鳥池工房跡で見つかったような、実際に生産作業をおこなった場所ではなくて、生産施設を管理するようなものだったと思われます。

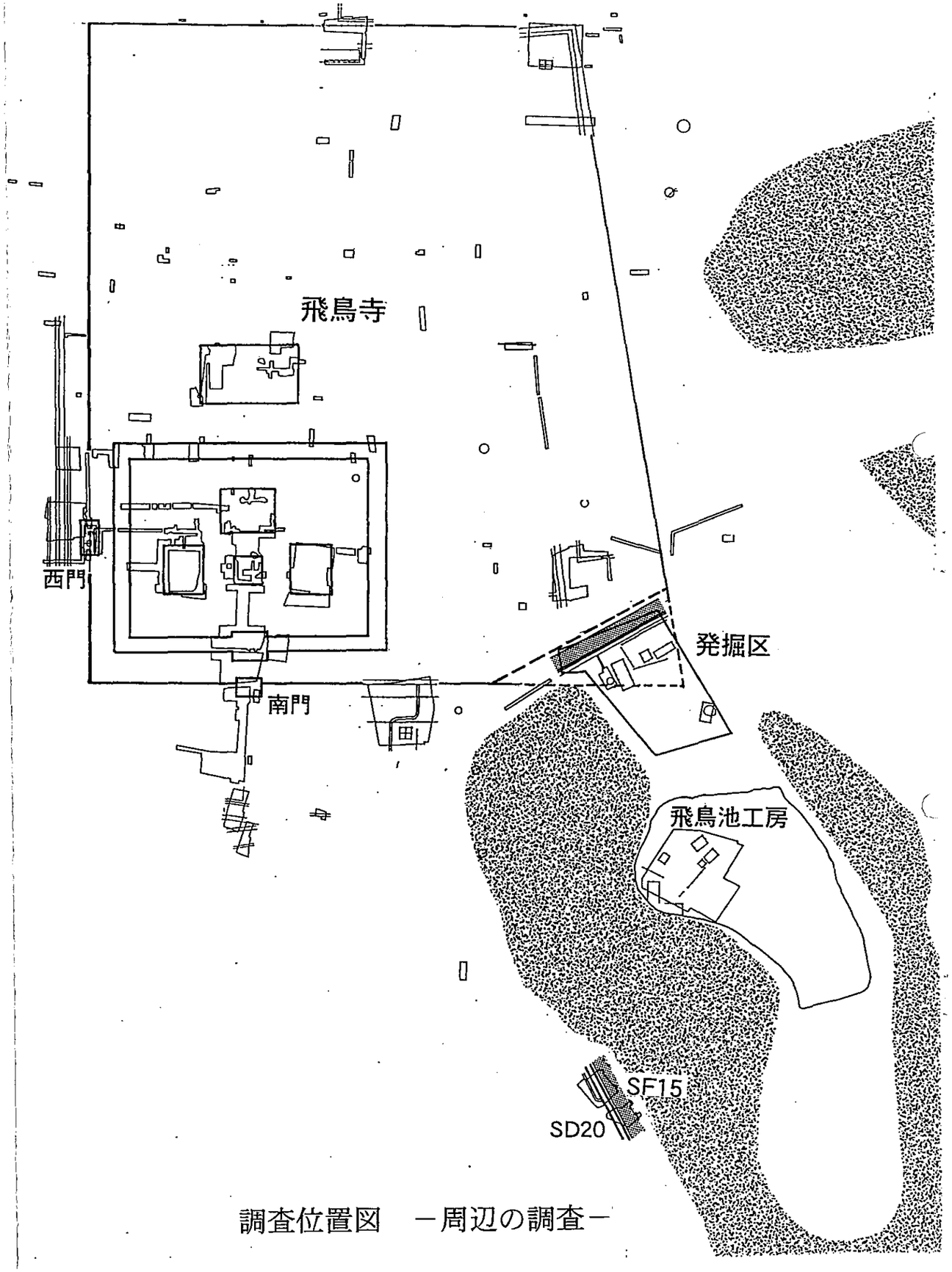
まとめ

今回の発掘では、丘陵の北側をかすめる道路があったことがわかり、飛鳥のなかでの道路の状況が徐々にあきらかになってきました。北側の飛鳥寺は、その道路のために、寺域が斜めに切られていました。いっぽう、道路の南側は、かつて発見された飛鳥池工房を含む大きな敷地で、その北辺の道路に面するところには、工房を管理する施設があり、そこには立派な井戸や建物があったことがわりました。

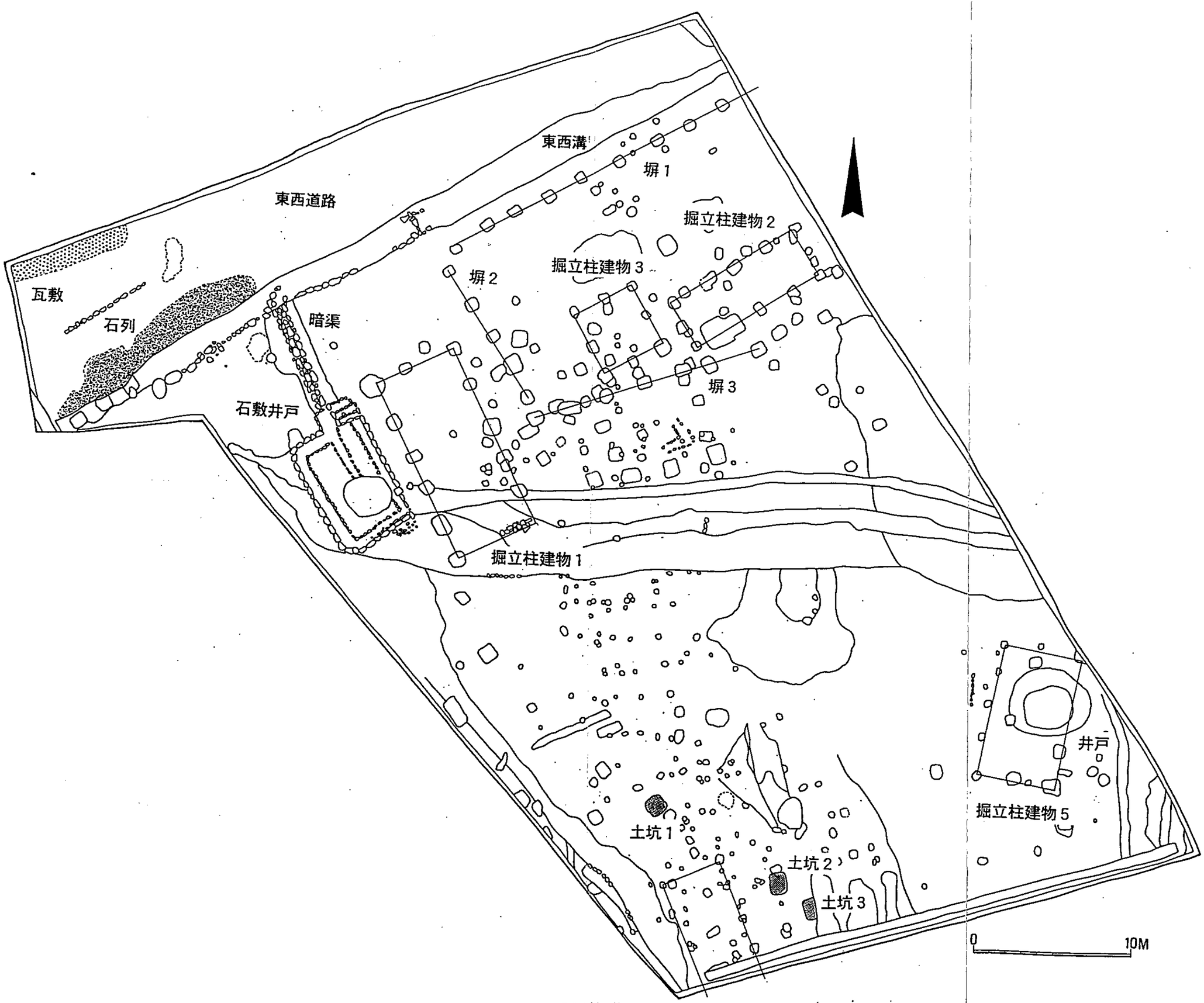
これからの調査によって、飛鳥寺の寺域の東南部分の塀の位置を確定し、道路の南の施設内のようすを明らかにしてゆく予定です。



飛鳥とその周辺 （小沢毅「飛鳥浄御原宮の構造」『堅田直先生古希記念論文集』1997年）



調査位置図　－周辺の調査－


東西溝
塀1
東西道路
掘立柱建物2
掘立柱建物3
塀2
瓦敷
石列
暗渠
塀3
石敷井戸
掘立柱建物1
井戸
掘立柱建物5
土坑1
土坑2
土坑3
0
10M
掘立柱建物4

遺構平面図